

湯浅城跡の調査成果

湯浅城跡は、湯浅町の中心部を見下ろす標高77mの青木山に立地する。湯浅城跡については、天保10年(1839)の『紀伊続風土記』に、湯浅氏発展の祖である湯浅宗重によって築かれた「古城跡」として紹介され、また嘉永4年(1851)の『紀伊国名所図会』では「湯浅城蹟」という名称で記事が掲載されるなど、古くから湯浅本宗家の城跡として認識されていた。しかし、これまで本格的な調査は行われておらず、詳細は明らかでなかった。湯浅町教育委員会では、平成29年度に航空レーザー測量を実施し、城跡の規模や構造の把握を行い、平成30年度には築城年代や変遷を明らかにするための発掘調査を実施した。

歴史

『紀伊続風土記』には、湯浅氏の城を湯浅宗重が方津戸峠から当地に移したと伝えるが定かではない。『平家物語(覚一本)』には、屋島で敗れ落ちた平忠房が「紀伊国の住人湯浅権守宗重をたのんで、湯浅の城にこもった」とあり、湯浅宗重の居城として湯浅の城が治承寿永の内乱期には既にあった可能性があると言える。宗重は湯浅の町場における拠点を整え、湯浅湾と熊野街道といった水陸交通の要所を掌握して、軍事的な拠点である湯浅城と一体となる本拠地を形成したと考えられる。

康暦元年(1379)紀伊国守護の山名義理によって、湯浅城をはじめとした湯浅党の拠点が次々と落とされたと『花營三代記』に記述されている。また、『紀伊国名所図会』には文安年間(1444～49)に後南朝の勢力が義有王を奉じて湯浅城に立て籠もったということが、『残櫻記』の記述を引用して紹介されている。分布踏査では、16世紀後半の備前焼も確認されていることから、戦国時代においても何らかの形で利用されていた可能性が考えられる。



湯浅城跡上空から湯浅市街地を望む(東から)



湯浅城跡近景(南から)



湯浅城から湯浅の町場を望む(東から)

構造

現在、丘陵の斜面地は大部分がみかん畑として利用されており、頂上付近は主として雑木林や竹林となっている。山の北側は急傾斜であり、南側から西側は山田川が流れており、天然の要害と言える。城跡は山頂に築かれた主郭(曲輪Ⅰ)を中心として、各尾根筋に沿って大小の曲輪が展開する。曲輪Ⅰ～Ⅲは土塁で結ばれ、曲輪Ⅰの北側斜面には帯曲輪が断続的に取り巻くのは、北側斜面からの侵攻に備えた防御施設と判断される。曲輪Ⅰの東側には、土橋状遺構でつながる比較的広い平坦面(曲輪Ⅱ)が存在する。曲輪Ⅰの南東側には最も広い平坦面(曲輪Ⅳ)があるが、発掘調査の結果からこの平坦面は鎌倉時代に谷を埋め立てて構築され、礎石建物が存在していたことが明らかとなった。

湯浅城の構造は、曲輪Ⅰを中心として東西に曲輪群が展開する求心性の高い構造となっており、中世の城郭によく見られる堀切や横堀といった空堀が少なく、県内では他に類をみない縄張り構造を持っているという特徴がある。構造的な変化については、曲輪Ⅳを中心とした館城から曲輪Ⅰを中心とした山城へと改修が行われた可能性が指摘できる。



曲輪Ⅰ(南から)



土塁(曲輪ⅠとⅡの間)(東から)



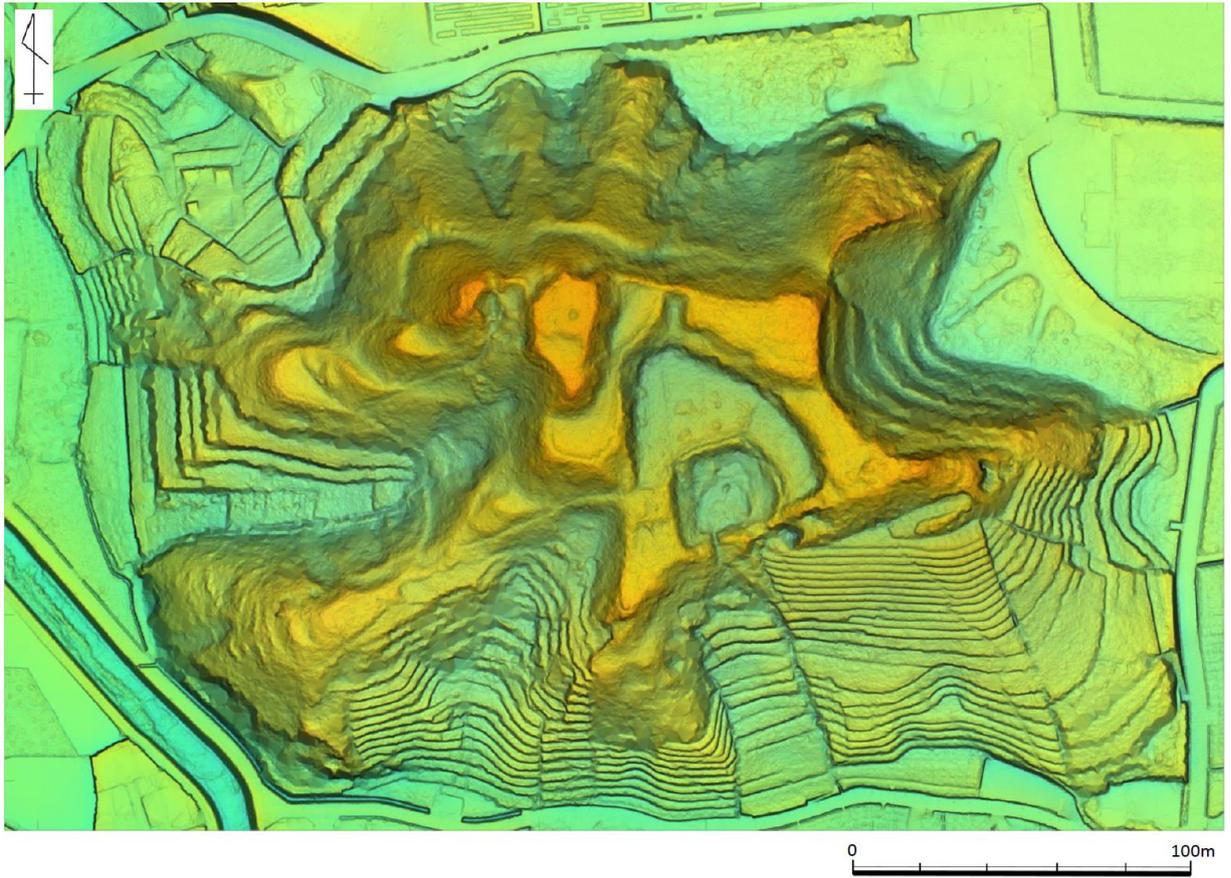
曲輪Ⅱ(西から)



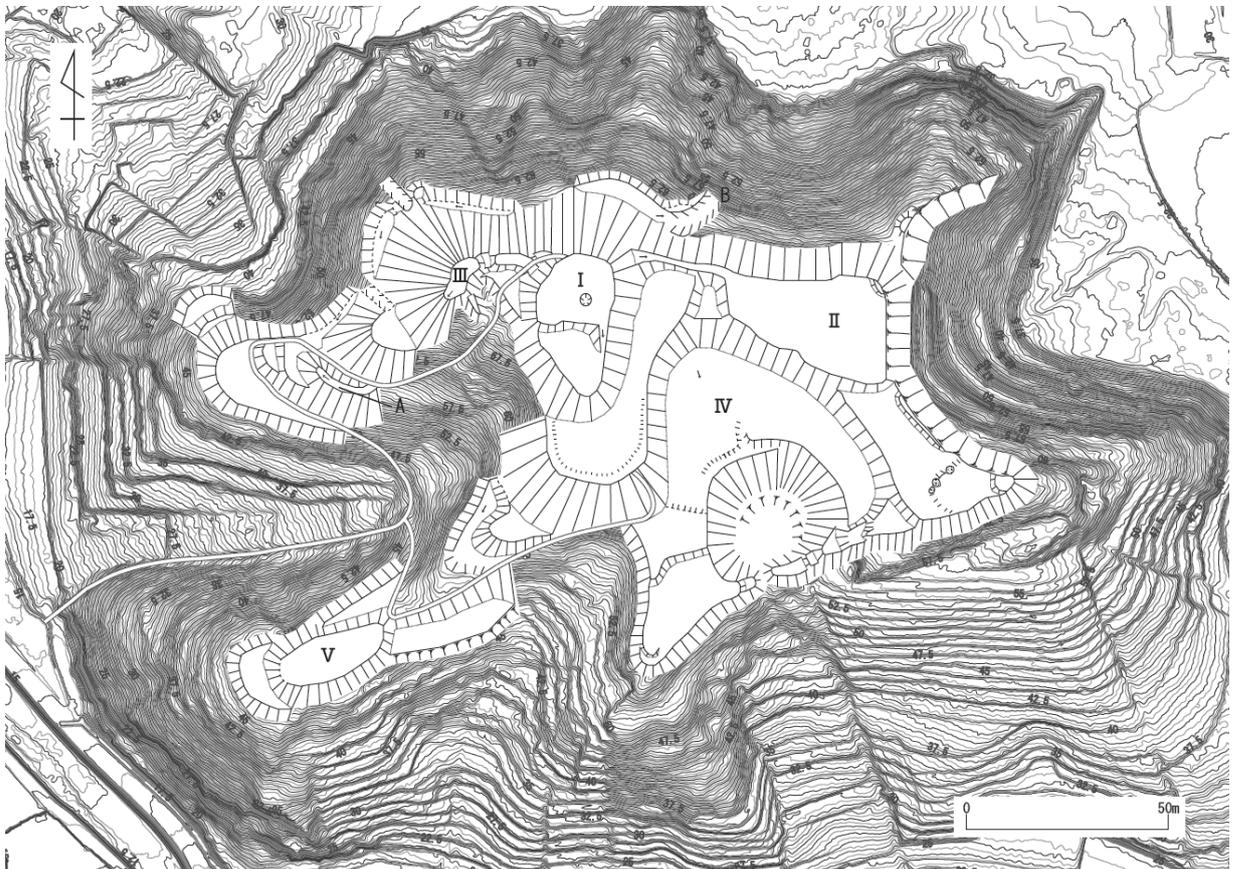
曲輪Ⅲと土塁(東から)



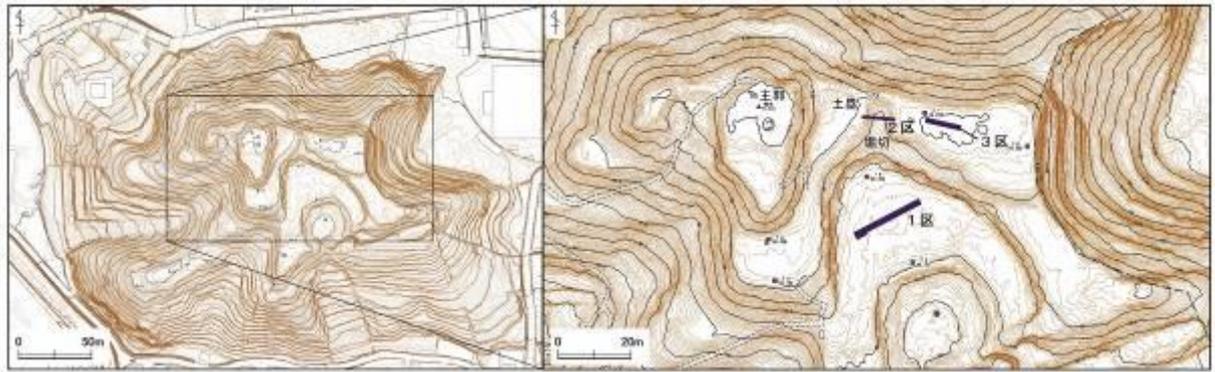
曲輪Ⅳ(北西から)



湯浅城跡地形解析図



湯浅城跡縄張り図



発掘調査区配置図

発掘調査の概要

発掘調査は、城内最大の平坦面である曲輪Ⅳに1区、曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間の掘切部分に2区、曲輪Ⅱに3区を設定した。

【1区】 曲輪Ⅳの大規模な平坦面は、もともと谷状の自然地形であった場所を鎌倉時代に造成して構築していることが判明した。地表面から自然堆積層(岩盤)までは最も深い部分で2mあり、中世段階に繰り返し行われた整地土は最大で約 1.4m もの厚みが確認された。出土遺物から判断して、平坦面の構築は鎌倉時代の 13 世紀に遡ると判断できる。鎌倉時代から室町時代にかけては、高さの異なる複数の礎石が検出され、少なくとも4時期以上の整地と礎石建物の構築が繰り返し行われる屋敷地としての土地利用が行われていたことが確認された。整地層の中には、広範囲の焼土層が検出され、出土遺物から判断して 14 世紀中頃には火災が発生していたことも明らかとなった。焼土層の上面においても整地と礎石の構築が行われていること



1区土層堆積状況(南から)



1区全景(西から)



1区焼土層(北東から)



1区焼土層遺物出土状況(南から)



1区室町時代の鍛冶場跡(北から)



1区出土遺物

から、火災後も引き続き屋敷地として利用されていたことがわかる。その中には、備前焼を伴う鍛冶炉と考えられる遺構があり、鉄滓や鉄釘なども出土することから 15 世紀頃には小規模な鍛冶場を有していたと考えられる。その後、戦国時代にはほとんど活動は行われなくなり、以後は畑地などに土地利用が変化していったと想定される。

【2区】 曲輪 I と曲輪 II の間に設けられた堀切は、自然の岩盤をうがって構築されている状況が判明した。堀内の堆積は、山頂の曲輪 I から流れてきたとみられる焼土層が西側から堀底にかけて堆積しており、その中には 13 世紀から 15 世紀までの遺物が含まれていた。以上の状況から、この堀切は少なくとも 15 世紀までには構築されていたと判断できる。

【3区】 調査の範囲では明確な遺構は確認されなかったが、中世の土師器が出土しており、この付近においても何らかの土地利用が行われていたと考えられる。



2区全景(南東から)



3区全景(北西から)

これまで湯浅城は、湯浅宗重が築城し、それ以降は湯浅本宗家の軍事拠点として存在したものと伝えられてきた。発掘調査の成果からは、曲輪IVの大規模な平坦面が遅くとも 13 世紀には谷状の自然地形を埋め立てて構築していたことが判明し、湯浅党が権勢を誇った時期に城館の形成と本格的な利用が開始されていたことが確認できたことは、非常に大きな成果と言える。鎌倉時代から南北朝期にかけては、4 度以上の整地と礎石建物の構築が繰り返し行われていたことが判明し、茶道具である瓦質土器風炉や古瀬戸折縁皿、中国製青磁などが出土していることから、単に戦時における要害の城というだけでなく、饗宴や儀礼的な場としての利用など多様な性格を有していたと考えることができる。